



指導主事だより

なんだか うれしい

教育委員会

相談時間等

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 0267-56-3131 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 0267-56-1076 (呼)
- 立科町児童館/
午前 11時50分～午後1時40分
電話 0267-56-0303 (呼)
(担当 指導主事 中島 一彦)

日本を代表する教育アドバイザー 工藤勇一先生に来町していただき、老人福祉センターで講演をしていただきました。立科町の教職員、保護者が一堂に会し、これからの教育の課題を学び合いました。講演内容の要旨を以下にまとめました。

①宿題は子どもの主体性を失わせる

子どもは自分の意志で勉強するのではなく、やらされ続けている。量を押し付けられ、生きていく力につながっていない。大量の課題をこなしている割に学力がつかない実態は非効率な日本社会そのものを表している。これからの時代は指導から支援への教育の在り方を考える必要がある。「手をかける教育」も「甘やかす教育」も「厳しい教育」も「その子の自己決定」がなければ、何の変わりもない。手をかければかけるほど自律できなくなり、自分がうまくいかないことを誰かのせいにする、というように主体性を失い、自分も他人も嫌いになり、不幸な気持ちになってしまう。

③経済中心の世界観から人間中心の世界観へ

地球規模で「人類が生き続けていける持続可能な社会をつくること」を実現するために教育があるということ。経済開発機構（OECD）が掲げている教育の目標がウェルビーイング。経済ではなく、人間そのものの内面的な幸せ、さらには社会的不公平や格差などの観点も含めての幸せを目指すということを意味している。

④ウェルビーイングを実現するためには主体性を発揮していくこと

日本においても、政府の教育再生会議の提言にもウェルビーイングという言葉が登場します。主体性と当事者意識をもって組織や社会を変えていくこと。主体性を発揮するために子どもたちが当事者になる学びの場を作り上げていくということ。2020年の指導要領では「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して、行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい」というメッセージを発している。つまり日本の教育においても、自律する子どもを育てることが最上位の目標ということ。



②奪われ続ける主体性と当事者性

喧嘩やトラブルが起きた時、大人が「仲良くして」とジャッジに入ってしまう。子どもにとっては、どうやって折り合いをつけるか、他者をどう理解するか・・・を学ぶチャンス。教師も親も寄り添うだけ。自己決定をどれだけ重ねることが出来るかが教育。

講演会に参加された何人かのお母さんから、「自分の子育てを深く見つめ直しました」の声を寄せていただきました。講演内容をお父さんにじっくりと伝え、夫婦で子育てについて話し合った・・・そんな報告もうれしく、ありがたいものでした。C先生は「工藤先生の著書や話に触れるたびに、自分がぐらぐらするんです」と一斉に制圧してきた自身の授業を深く見つめ直していました。お母さん、先生方の今の思いに触れながら、感じたことを記します。

私たちは子育てを通して、子どもの方に心に向けてみたり、そうかと思えば、教師や親としての立場から思いを強く行使したり、自分の軸足が右に左に揺れ動くのを感じています。今の私は、どちらかだけに軸足を置いて子育てを考えることはできません。親も教師だれしもが、我が子にとって良い存在でありたいと思います。けれど、その思いが、子どもたちにとって

良い親、良い教師とは限らないところに教育のむずかしさがあります。C先生、お母さん方、私たちが唯一子どもに出来ることは、子どもに近づき、心を寄せること、子どもの今に耳を澄ますこと。こうした形にならない思いはエネルギーを随分と消耗もします。辛抱を伴うことだからです。つつい力を行使してしまう。その思いから離れて、子どもに任せてみる、授業では子どもたちの学び合いの時間を増やしてみる・・・そういう近づき方をする事で、子どもは変わっていくものです。子どもに任せることは親や教師である「私を見つめること」と同じことかもしれません。子育てを通して、私たちは自分自身への問い直しを迫られます。子が煩わしい、愛せない、つつい感情的になってしまう等々、泥にまみれるような思いを抱えながらも、我が子を思う気持ちから、決して逃れることはできません。こうした日々の様々な心の動きを通して、自分を知る、自分になっていく。親になっていく、教師になっていく。お母さん方、先生方・・・深い味わいのある子育ての歩みを、ぐらぐらとしながら、これからも共に重ねていきましょう。そして学び続けましょう。